

～ 災害文化の伝承 ～

『増大する浸水被害リスク！』 安八町で河川防災講演会



- 安八町牧区長会が主催する「河川防災講演会」（協力：安八町役場）が12月21日（日）、安八ふれあいセンター（同町外善光）で開かれた。防災に関する知識を深め、地域防災力を高めようと同区長会が企画したもので、国土交通省木曾川上流河川事務所の職員が講師を務め、地区自衛防災隊員ら約80名が参加した。

冒頭、挨拶に立った堀正・安八町長は、先日、開催された登龍中学校3年生と語る会のことを引き合いに出し、「子供たちは、S51長良川安八水害が風化し、忘れられていくことをとても危惧していた。新たに「水害の日」を制定することや、過去の水害の歴史を紹介する資料館の建設など、健全なまちづくりのために、しっかりと防災対策を進めるべき」と提言を受けたことを披露した。

第1部では、木曾川上流河川事務所の稲葉傑・副所長が「長良川・揖斐川の治水の現状と対策」と題して講演。稲葉氏は、西美濃地域で発生した災害の状況について説明した上で、近年、頻繁に発生しているゲリラ豪雨を取り上げ、「100年後には地球の平均気温は1.8～4.0℃上昇し、豪雨による洪水も大幅に増加する。

また、台風も大型化すると言われている」とした上で、「雨量や水位などの情報を上手く活用し、命を守る行動に繋げてほしい」と訴えた。さらに、東日本大震災の教訓から、今後の地域防災のあり方を提唱する群馬大学の片田敏孝教授の言葉を引き、次の災害への備えのため「①行政の設定した想定外力に囚われすぎないこと、②最善を尽くすこと、③自らが率先して避難することが重要」と紹介した。

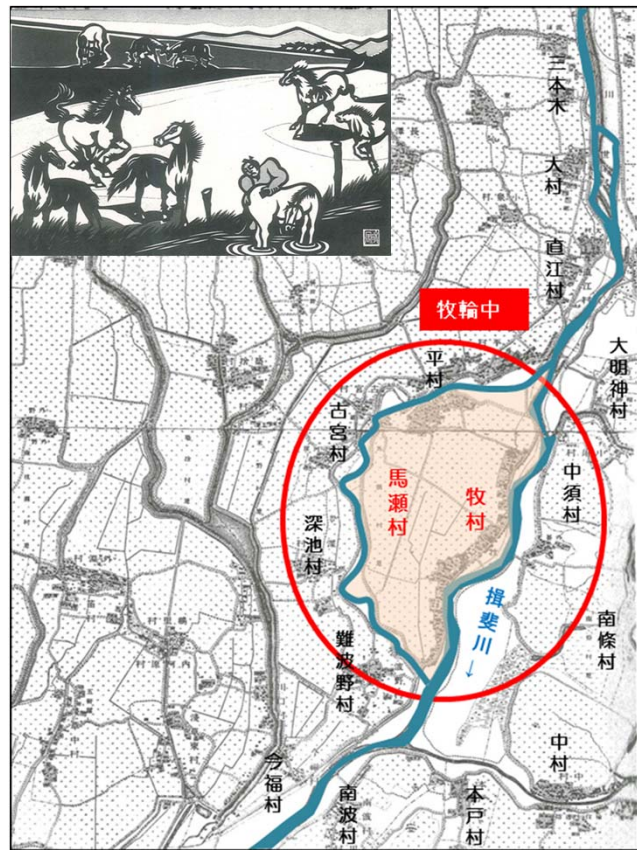
牧輪中の「小字」に関する地名由来について

ほその たかし

第2部では、細野貴司・揖斐川第二出張所長が「地域防災と地名由来」と題して講演。

細野氏は、安八町を含め西美濃地域が水との関わりを持つ地名が多いことや、揖斐川の堤防上に祀られている水神様を取り上げ、「この地域は地形的特徴から、昔から常に洪水に見舞われ、水に苦しめられてきたところ。地名は地域に隠された自然災害の危険性を警告し、水神様は、かつて堤防が決壊した場所に多く位置し、その地点の危険性を後世に伝承警告している」とした上で、「こうした歴史の背景に触れ、地域の地名を知ることが、現代・未来のまちづくりや地域防災を考える道標になる」と訴えた。

- ・ 牧は、古く「馬置」と記され、馬を置く所であった。かつて隣の馬之瀬（現在の大垣市馬瀬町）とともに揖斐川の中洲にあって、牧輪中をつくっていた。馬之瀬は、牧村の枝郷（分村）で、馬洗いの川の瀬から生まれた地名。「牧村史」によれば、源義経（1159～1189）に良馬を献上した縁で、牧郷の地名を与えられたと伝えられている。



明治24年の河川流路図



- ・ **附砂**は、もとは砂入（すな入り）。「附」には土山の意味があり、砂で出来た山、つまり中洲のこと。昔の中須川は、この辺りから揖斐川に注いでいた。
- ・ **石土手**の土手とは堤防、岸のことであり、堤の補強に石土手を築いた。また、池に菱が繁茂することから名付けられたのが**菱池**。
- ・ 打出は、川口で水を川へ打ち出すこと。悪水の落ちる江川があったことから、**堤内打出**と名付けられた。また、池や沼が多く、魚を主食とする鴈などの鳥がよく住んでいたことから**鴈ヶ瀬**。
- ・ 忠三と言う土地の有力者が、自分の土地に渡し場を造ったことから**三河渡**。
- ・ **猿尾**は蛇籠とも言い、竹籠に石を詰めたもの。蛇籠は川の中に突堤のように積み、川の流れを緩めたり、堤防を補強したりするためのもの。旧揖斐川の水勢を弱めるために猿尾堤があったところと見られる。
- ・ **久保山**の「クボ」には低く窪んだ所の意があり、「ヤマ」には耕地の意があります。低湿地を耕地にしていたところ。

■地域コミュニティの自治と「絆」で減災目指す！

- ・ 牧地区は揖斐川と長良川に挟まれた水郷地帯に位置し、昭和51年の長良川安八水害時は必死の水防活動で難を逃れた地域です。あれから40年余り。牧区長会では、本年10月に揖斐川上流の徳山ダム・横山ダムを視察し、揖斐川の治水事業の現状を学びました。また、昨年は3世代交流イベントにも取り組んできたところです。区長会では、今後も地域コミュニティ活動を積極的に進め、こうした活動や今回の講演会を通じて、防災に対する意識啓発と地域の災害対応力の維持向上に努めていきたいと考えています。



安八町・牧区長会
会長 種田邦彦